

特42

986

庫藏  
宮本無三四二刀傳  
上卷



205340-001-2

特42-986

宮本無三四二刀傳 (絵入実録)

春風亭 香雨 / 編

上

M18

EDV-0523



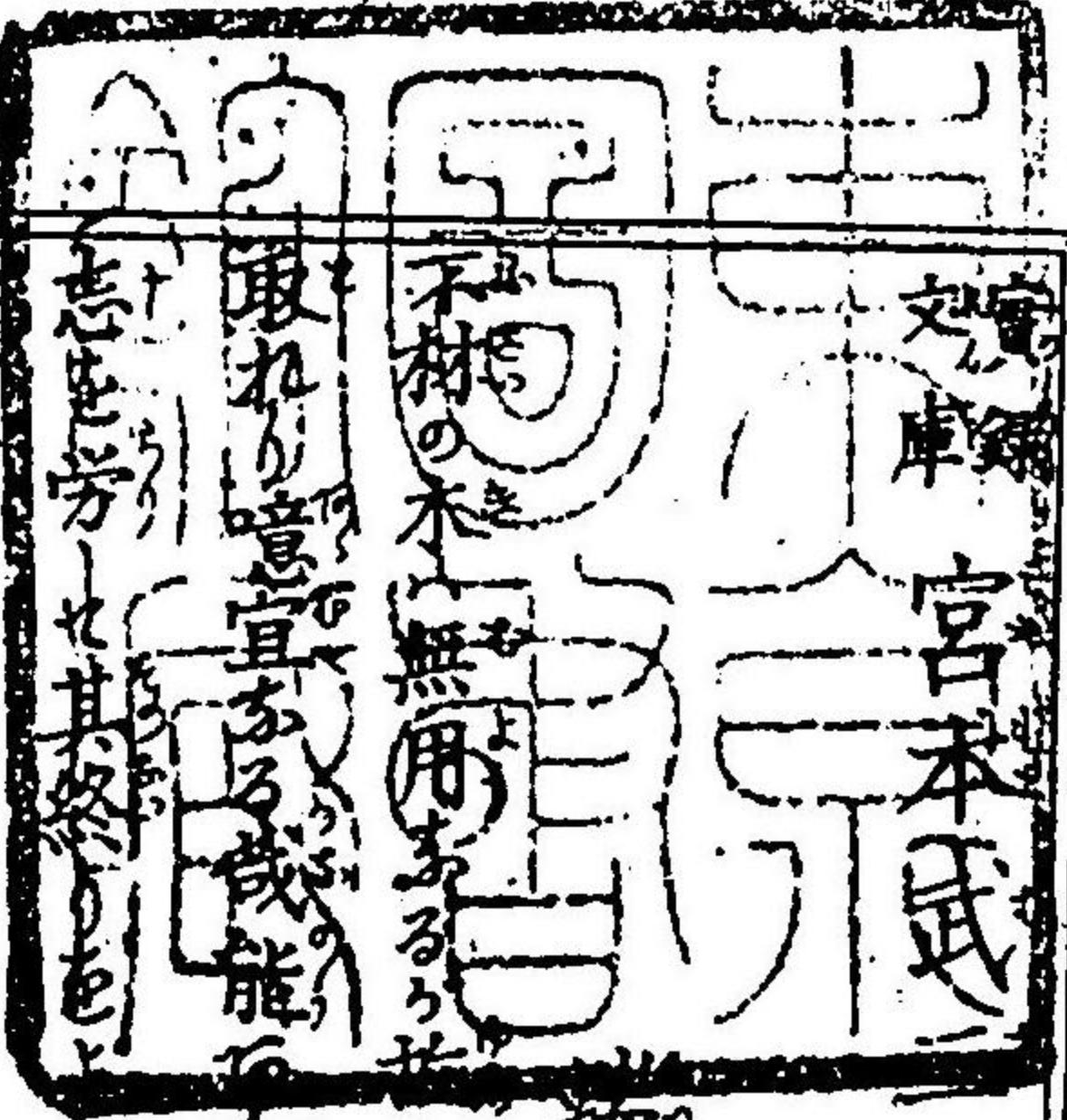


言野  
事鳥實  
紙少  
委必録  
春陽堂卷元

春陽堂卷元

如實 宮本武 四二刀傳 上の巻

東京 春風亭 香雨 編



不材の木 無用なるは 天年を得主人の 雁い不材あるを以て 死さる 莊周の 其間 不慮 人事を 取れり 意宜なる 哉 能りてよく 勝れたるも 禍の端あり 諸葛武侯が 賢あるも 畢に 五丈原は 心を 志を 勞れ 其終りを するに 能いを 荆軻が 刺おけるも 其刺の 為み 死を 是所謂 其能を 以て 其生を 苦めらるる 者あり 抑茲に 説出を 天正年中 世に 顕れたる 劍道二刀流の 達人 みて その 名を 四海の内 中 轉りせ 宮本無三四 一話のみ 人 开も 此無王四 といふ 小早川隆景 侯の 藩士 みて 劍術の 師範家 ある 吉岡太郎右衛門の 三男 みて 僅か 年二 七の 春吉岡 高弟にて 肥後 熊本 本 城 主 加藤 侯 仕 是も 師範 役 あり 宮本武右衛門 養子 あり あり 故 父 姓を 名 乗ぎて 養家 姓を 以て 宮本 と 呼び あり 茲に 又 其 項 佐 木 巖 流 と 呼び 神道 正傳 真刀 流の 達人 あり 諸國を 修行 巡つて 播州 姫路の 城下 に 至り 逗留 数日 及び 那 當 城の 藩中

宮本武 四二刀傳 上の巻

おて 劍術を能はる者とも 巖流を試合ふ及ぶといふも 一個として之を勝もの有りざる由を城主  
 の 聞ふ達せしむる主君 巖流の 劍道を精ききを愛つて 召抱へん旨を申し諭されけるが 巖流外  
 お望みせりけん其義を堅く 辞退せしむる然らば 召抱への義は且くおき 客分とあり 當所止  
 まり 藩士に教導せられよと 再應の上意 辞する由も有りされば 巖流は 欣然と 拝承し 賜ふ  
 所の 屋敷に 大道場を 仕構へ 専ら 劍術の 指南を あんふ 居たるが 元是 巖流の人とあり 傲  
 慢にして 人を 視ると 芥の如く 暴戻の 行業 抄からむ其故を 遂に 吉岡を 暗討に 一旦  
 其身を 隠し 無三四ヶ為 其仇を 復へさるふ至りあり 却説 吉岡太郎 右衛門に 近ごろ  
 氣鬱の 病を 發し 且 肋骨の 間時として 痛みを 覺えし 良医に 療治を 乞ふて 保養を  
 ほざりあり ねども 其功更に見えぬ 然るに 病は 温泉に 湯治せば 速に 全快なり 人の 勸むるも  
 の 有りし 吉岡も さも なるべし 意を決し 其由 主君に 願出 百日の 暇を 賜り 攝州 有馬の 温泉に 赴き  
 浴する こと 数日 ならざりて 痛きを 忘れ 身体を 治り ありし 尚 入浴を する中 荏苒として 五十日  
 を 経たり 今 早帰國を 志さんと 主従 二個 有馬を 出立 播磨路を 蒐り 吉岡 忽ち 地思ふやう 此國に

名に 買ふ 名所 古跡の 多かる 地にて 再び 来る地 計られぬ 此 帰路を 使侍 され 此 處等の 名所を 探ら  
 らせ せと 急ぐ ぬ 旅の こと され 残る 隈に 古跡を 訪ひ 巡々 九月の 下旬 姫路の 城下 まで 蒐る 頃  
 一も 夕陽 西に 傾き 旅行人の 多り 市街の 賑ひ あり 市 兩側の 旅籠屋より 旅客を  
 止めんと 獲ふ 紅粉を 粧ひ 女子ども 旅人 見ると 等しく 僧俗の 別ち なく 引止め 或ひは 商估  
 來門より 拂ふ 袖を 引とめ 駈行 袂を 引ちぎり 擔はし 荷物 を 引奪ひ 難なく 大勢 取かり  
 人を 引込む 所も 有り 引込 行李を 奪ひ 返し 類を ぶらり 走り たり 吉岡 彼是 打見ながら  
 何心 なく 過ぎ 行くを 網子屋と して 旅籠屋の 裏より 二個の 女が 駈來る 一個は 大體 みて 兩の 類  
 辺の 所も 照れる 桃の 如く 腕の 毛こそ きれ 綱が 得たる 鬼神の 肘も 異あり ざるが 吉岡が 衣襟  
 を 引掴む 又一個は 越後の 板額 女が 再生の 如く あるが 背後より 其腰を 抱きて 動り せむら 泊  
 りたまへし 早く 無体 にお入る 引放さんと 聞れども 劍術者 ともいせ ば 兩人 寄て 天も  
 上は 地も 付けを 難なく 内を 引据え たり 吉岡 大に 興ふ 乘り 此女 等ハ 実ハ 普天の 下の 豪傑 あり  
 りと 笑ひ ながら 草鞋を 解り せやがて 客間 に入り 湯飯 徐にして 息み けり 〇 然る 吉岡 太郎 右衛門

寶劍文庫 卷之二ノ一

門へ行歩の勞倦一睡快く寐入て旅宿の寂寞を忘れ覺え曉ふ至りぬ然るも宿主一番起出て  
 炊爨を呼起し火を打つ音と俱に籠の下焼折敷の埴り紙門の透り入て摺盒の音雷の如く  
 る不障外の旅客二三個起上り行装をふむ其話声耳お貫きいぬ眠りがたきまふ越方行末の  
 事ども思ひふくる中早膳をまゝもる器皿の響と旅人の飯お付て著音高く何れも羨をまゝもる鳴  
 咽つ更ふ長鯨が百川を吸ふが如く殊  
 此草の食中の八仙と謂つべき者あり  
 と獨言して腹を抱へ嗚呼喋まの  
 旅宿の形状とされと倦ると感旅行  
 の樂もあれなき我の急がぬ旅あれ  
 一兩日此處お逗留お此辺の名所  
 をも尋ぬぬまご五ツ刻限ふもや  
 けれ今一睡して面白き夢や結ん



門へ行歩の勞倦一睡快く寐入て旅宿の寂寞を忘れ覺え曉ふ至りぬ然るも宿主一番起出て  
 炊爨を呼起し火を打つ音と俱に籠の下焼折敷の埴り紙門の透り入て摺盒の音雷の如く  
 る不障外の旅客二三個起上り行装をふむ其話声耳お貫きいぬ眠りがたきまふ越方行末の  
 事ども思ひふくる中早膳をまゝもる器皿の響と旅人の飯お付て著音高く何れも羨をまゝもる鳴  
 咽つ更ふ長鯨が百川を吸ふが如く殊  
 此草の食中の八仙と謂つべき者あり  
 と獨言して腹を抱へ嗚呼喋まの  
 旅宿の形状とされと倦ると感旅行  
 の樂もあれなき我の急がぬ旅あれ  
 一兩日此處お逗留お此辺の名所  
 をも尋ぬぬまご五ツ刻限ふもや  
 けれ今一睡して面白き夢や結ん

と再び金引冠りまゝ眠らんをまゝ  
 所へ忽地この家後園不何なりと多く  
 人聲して物争ひを仕出せし如く其  
 中不執手合ふ響音き高りうりして確  
 乎不木太刀の音あり心を静め耳を  
 敬つる不全く武藝の稽古なれ吉  
 岡眉を擧め此四隣に総て商估の  
 家並揃ひて諸士の住居の見えざる  
 不木劍の音聞ゆる如何ありんと其俣起出で紙門を叩開け立出るふまや哪もあれ街道往  
 来の人綿々として引も切りを繁花あること昨夜ふまさされり吉岡総て主人を呼び我の西国の  
 者ふより入浴のため有馬お馳せ既お故路おかれりゆゑ不當国の名所をもし一覽せんとおもひ  
 権且この家お逗留せん此義宜く計ひおねまゝ暮れぬ此辺まで商估の家居をらん

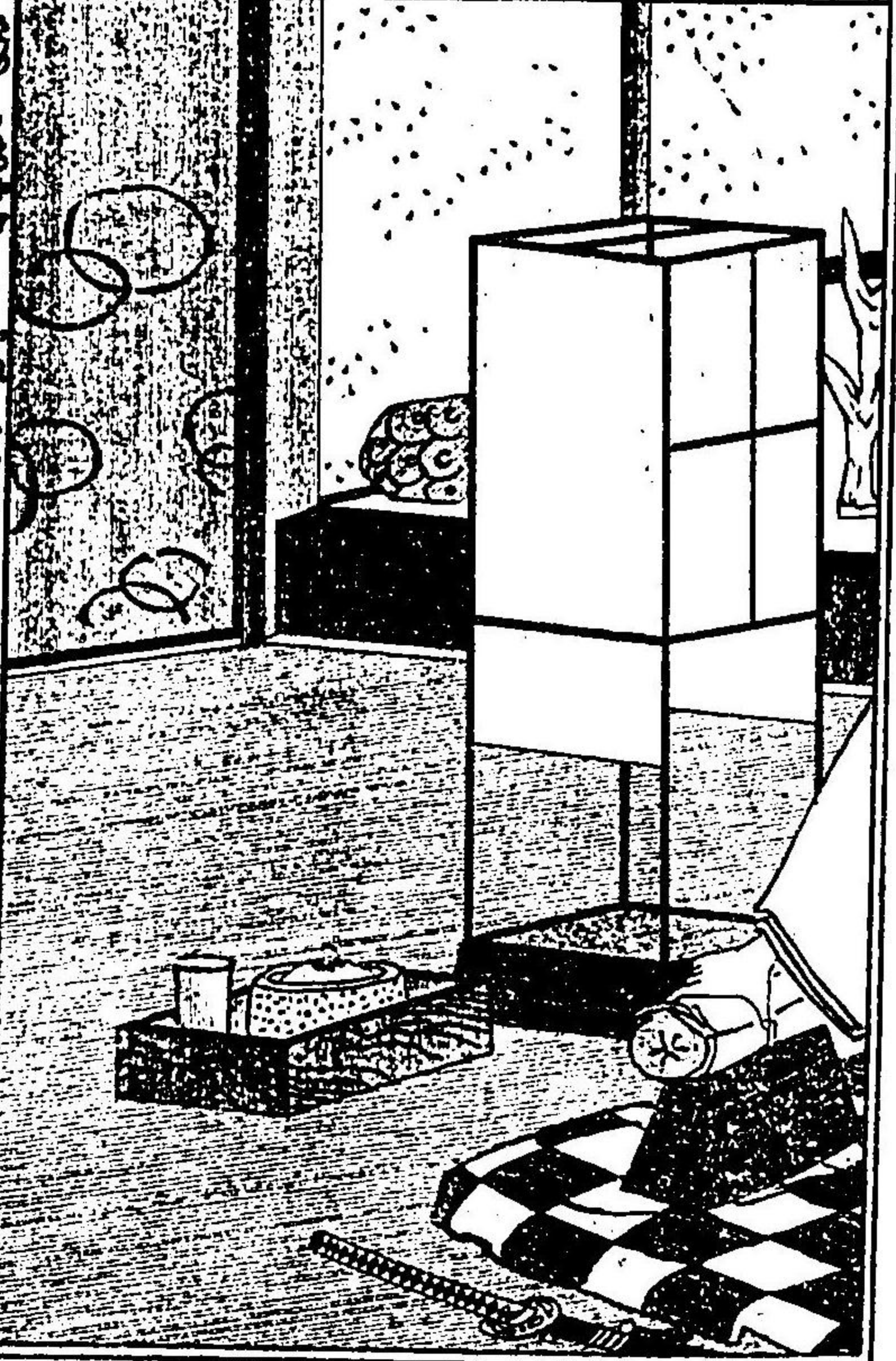


と再び金引冠りまゝ眠らんをまゝ  
 所へ忽地この家後園不何なりと多く  
 人聲して物争ひを仕出せし如く其  
 中不執手合ふ響音き高りうりして確  
 乎不木太刀の音あり心を静め耳を  
 敬つる不全く武藝の稽古なれ吉  
 岡眉を擧め此四隣に総て商估の  
 家並揃ひて諸士の住居の見えざる  
 不木劍の音聞ゆる如何ありんと其俣起出で紙門を叩開け立出るふまや哪もあれ街道往  
 来の人綿々として引も切りを繁花あること昨夜ふまさされり吉岡総て主人を呼び我の西国の  
 者ふより入浴のため有馬お馳せ既お故路おかれりゆゑ不當国の名所をもし一覽せんとおもひ  
 権且この家お逗留せん此義宜く計ひおねまゝ暮れぬ此辺まで商估の家居をらん

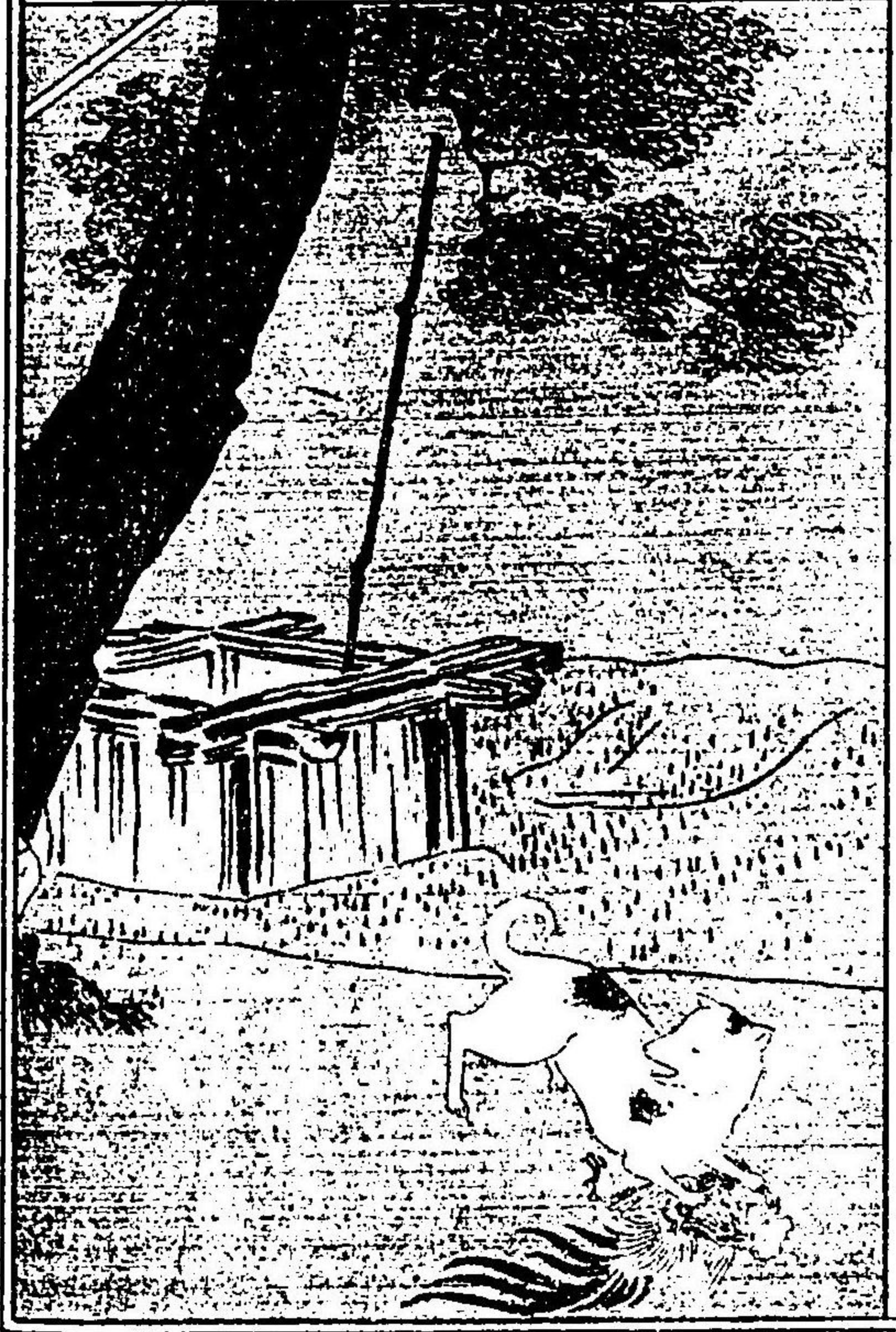
先刻より木剣の音騒々し何れの處ある也房主のゆやう我が家の後園の方高塚の百ふ  
たひ然て衙門あり其中威家中衆の住居にて只今稽古の音の聞えは佐木當流と申此藩  
客分の人の住る家にて侍りその佐三木氏といふ現今天下の一人元來諸國を武者修行し  
この春の頃より此地不來り城中の諸士と武藝を試むる不是一個の勝者ふ一夫故主君の  
覺之愛たき茲止めて諸士の師範と  
頼まれり又隨て取扱も叮嚀ある  
とぞ然バ毎日早天より木刀の音絶  
えを夕不至るまでの稽古あれは近辺  
の者も私共も騒々しので困りまをを  
語るを吉岡打聞て然もなるべと  
も何らん又こそ手隙の折あらば來りて  
語り玉れと言つ庭下立て彼方



此方を打見遣るふ野菜の類小たち  
交る菊花の萌霜の爲小洞み朝顔の  
つる枯たる依不離小残り晩秋の何り  
さま小園の中といふも寂寥なり菜園  
の向ふ隔の土塀高く其彼方の岩流  
の家めて衆士の武藝を争ふ聲手  
み取も如く聞ゆ好める道のことあれは  
何となく見たき心地して土塀の方立  
寄て窺は土塀の下の方へ越て雨露の爲小朽破れて大の出入も程の賣所々ふ何りそれとも稽  
古場は些隔りてあるが故に其破れ賣より見ること能いざるを吉岡の本意ふきことと思ひ立ち  
戻らんと思ふ所(土塀の向ふ)より一匹の大狗賣を潜て馳來り吉岡が前を過ぎ驛房の打火  
場(行)と思ふより忽地一声雞の鳴声聞えたるふかの犬狗雄雞一羽引くをて元の賣へ入らんと



をるを驛房の後生二個房主とも小夫雞を取たるぞ大を敲て雞を助けよとつて手毎小房  
紫拐杖を引提追來る彼狗余り小追る、この急なる小元の寶小入ると能い小園の中を逃回る  
いとも猶啣下雞を放さず房主後生大焦燥て土塀の隅の方小追迫の勞紫を以て前脚  
を打て撃倒せし房主拐杖をふり上げて一連ふ三三つ打撃する小狗は大苦みて僅小雞  
い放すと雖も雞いせや死せしむぞ房  
主怒て弥力任せ小狗鼻柱を破ら  
れて倒れ死す此狗こそ佐木崑流が  
飼狗ゆて獅子丸と呼びたりかその啼  
声只事あらむと崑流が家の若党三  
個走り來る土塀の寶より此形容を  
覗き見て大驚き町人狗を殺した  
まど叫ひければ崑流之を聞付け馳



來り驚見て忽地怒を顕しをれ兩個の  
若党も狗を殺せし町人共を一々に  
突殺せし未とも終らざるまふ兩個  
短槍短棒を以て隔の塀を打破  
り我をいらんとせる勢ふ二個の若も  
のうちおどろき家内をさして逃入たり  
房主一時の怒に乗とて狗を殺せし  
慮忽の業を後悔ふて地ふ跪き  
事の子細を述べんとせるを若党も耳もかかむ短棒もつて房主を可活可死と撃をる  
吉岡も最初より事のやう花を見るといひも少も手を動かさば今房主が危きをまんとけんと思  
いとも無所為争を引出して主君の名を出さんよりいと避て入らんと思ふ所を若党左源太槍を以て  
追駈來り己も省止者よりとと打火場の入口よて声を放つて突掛たり吉岡此時身をひるがへし



槍首まろかど握との狼藉をるふ下郎共我の鎮西の武夫今般所用のを以て當驛止宿一今  
 庭中を徘徊する某何の所為のつて斯理不尽の振舞ふを劔器に素より無情の器必人を  
 傷ぶるの道具多し今斯る泰平の御代ふ方て罪なき人を損ふは汝等罪科免るべからむとひ  
 つ其槍奪ひより庭中へ抛捨たる手練尋常ふらされば若党共打驚さ黙然としていひを  
 りふ一教場ふ居合せ一壯士追々  
 駈来り四五十負ふも及一今吉岡が  
 手練を見て怖るがらも怒を發し  
 其奴ふ口を利は先打倒せと教場  
 より木刀棒を携来り威一同ふ吉  
 岡を追取込て打蒐るを吉岡少も  
 騒げる色あく腰刀ふも手をだま  
 けむ大音あげて叫び此中當家



の老臣諸役人いふまき我未未てい恥も争  
 ひを好むふ何らねとも浩る狼藉止をを  
 後日の証ふある者何れよといふより早く  
 一番みかる壯士三個が木刀を奪ひとり  
 其俣兩個を日月の冠といふ手を以て右  
 と左に打据たり手練の手中恰も木  
 刀の何たる所真劔を以て截らるより  
 も緊一三言といひ氣絶せり是意  
 るより五六個の壯士前後左右より一度小躍て打蒐るを物ともせざる吉岡の高の知れたる汝らう手の  
 中何十個でも撃来れといふまふ五個を打据たり然るも吉岡の思慮深き人なれば悉く打殺せむ  
 殺せむれど後難を避る所を以て威大事ある手を撃む半死半生ふを打据たれば最早一個  
 も掛る者なく生強ふること仕出来て壯士等ハ進退さふ谷り師匠品流の見る所驚さる氣色



の老臣諸役人いふまき我未未てい恥も争  
 ひを好むふ何らねとも浩る狼藉止をを  
 後日の証ふある者何れよといふより早く  
 一番みかる壯士三個が木刀を奪ひとり  
 其俣兩個を日月の冠といふ手を以て右  
 と左に打据たり手練の手中恰も木  
 刀の何たる所真劔を以て截らるより  
 も緊一三言といひ氣絶せり是意  
 るより五六個の壯士前後左右より一度小躍て打蒐るを物ともせざる吉岡の高の知れたる汝らう手の  
 中何十個でも撃来れといふまふ五個を打据たり然るも吉岡の思慮深き人なれば悉く打殺せむ  
 殺せむれど後難を避る所を以て威大事ある手を撃む半死半生ふを打据たれば最早一個  
 も掛る者なく生強ふること仕出来て壯士等ハ進退さふ谷り師匠品流の見る所驚さる氣色

もあり然るに只今吉岡が働きの更なる夫の業ふらねん心膽を挫かれ互に目を見合せて牙を  
 嚙ぞぞおえたり。○恚て此争ひの始めある旅店の房主後生の事どもい側ふありて始終の所如何  
 何んと思ふ所ふ高流眼前若党を吉岡不打倒され門人等も半死の難不罹一々忽地憤  
 怒心頭より発りて門人等を押除け自吉岡が前ふ找といふやう我が當家の師範にて佐と木  
 高流といふ者あるが先刻より貴殿  
 か手煉を見るも尋常の業不非  
 姓名を承るべといふ吉岡固より  
 私用の旅行なれば姓名を出さざる  
 厭を以て只穩便の計ひをまさん  
 と彼是問答ふ及ぶ中高流は性来  
 短氣なれば吉岡が姓名をさのらざ  
 るを憤り有無をいさむ身策をあり



門人等も向ひ各方の仕官の身なれば  
 後難も恐れ何り助太刀杯無用な  
 りいざ旅客名乗るも其銃を以て言  
 せとと廣庭不足場を謀り待受た  
 り此時吉岡が下部の忠直の者にて  
 主人の大事と思ふがまゝ股差を引き  
 提け主人の後ふつをを吉岡大ひま  
 下部を叱り己が如き者何の用ふり立  
 へき抑武士の命を預るも耻辱を蒙らざるを面目とせ急ぎ居るべと云ふがら密に耳元  
 小口を寄せ汝早く茲を出て備前の国三石辺まで相待つべ我此處を脱れて行べと叫ぶれば  
 下部心得荷物を拵へ逃出を旅舎の中も混雑と知る者絶て何らざりけり恚て吉岡太郎  
 右衛門も準備身軽ふたち出て庭前小向ひの各方事の可否見聞せられ如く死人小口よし



門人等も向ひ各方の仕官の身なれば  
 後難も恐れ何り助太刀杯無用な  
 りいざ旅客名乗るも其銃を以て言  
 せとと廣庭不足場を謀り待受た  
 り此時吉岡が下部の忠直の者にて  
 主人の大事と思ふがまゝ股差を引き  
 提け主人の後ふつをを吉岡大ひま  
 下部を叱り己が如き者何の用ふり立  
 へき抑武士の命を預るも耻辱を蒙らざるを面目とせ急ぎ居るべと云ふがら密に耳元  
 小口を寄せ汝早く茲を出て備前の国三石辺まで相待つべ我此處を脱れて行べと叫ぶれば  
 下部心得荷物を拵へ逃出を旅舎の中も混雑と知る者絶て何らざりけり恚て吉岡太郎  
 右衛門も準備身軽ふたち出て庭前小向ひの各方事の可否見聞せられ如く死人小口よし



死後の証據ふり玉と品流不近付き間合を詰め雙方無双の達人あれは眼光四方ふ配り而  
雄寄るよと見え一が刃音はつと響きたり門人等瞬もせむ見居たるふ再び吉岡が刀ひら  
めくと見え一が品流が刀の手を放れて地ふ落ちたり是吉岡が極意の手で神息剣と只けた  
る早業の手で電光燧濃の中三度打とよ術中刀の刃棟を以て其額を撃ちち轉動して目  
眩を所を取て押へ急地品流が胸の  
上に兼掛り劍鈍を咽喉に押當て只  
今某名乗る一某筑前の国名島  
の城主小早川金吾隆景が家臣吉  
岡太郎右衛門と申す者あり此劍  
皮肉を破らざる所が生死の界あり  
足下伏せよ也伏せざる也と其声所隣  
を貫き天地も響くばかり門人等も



品流が組布れたるを見て今以後難  
を顧る隙もなく廿餘人劍鈍を揃  
へて打向ふ此時表の方で数百人の  
足音して一個の壮士馬を旅舎のおも  
てに乗捨て庭前不馳来り狼狽あり  
諸士の面々手を下を者ハ罪科免る  
べからむ旅行の豪傑人を傷ぶるこ  
とあるれ某等當城主木下飛彈守  
の命に依て双方の意趣を承り紐さんか為向ふたりと云ふ壯士等淋瀝を刀を斬りし吉岡も手  
をゆるめ品流を助く此時騎馬の侍三個同く店内不入り茲に當城の隊頭黒官軍人跡の二個は監察  
役吉村佐一右衛門捕盜役澤田源十郎吉岡が前を抜む是則驛長が訴不依て駈付たるあり吉岡は  
礼を著し若坐を礼に品流も赤面ふらぬ三士皆聞かず動の原由を聞き品流ふりるや拙者



等只今所不すれば足下の不平より出たるを著し理非れ免れ互不憤を抑て和睦せらるべし第一身を傷るとさる孝道不背き第二里民を駭か第三城王への不敬あり殊更吉岡氏に主人馬前の忠死とつみも非を私憤不溺れて身命を墜さるべき忠も缺る道理あり利を曲て双方寛了れと殷勤不申を不ぞ吉岡喜悅斜ありを某始め申を如く私用の旅行よりでる憚を顧みざらんや一時の短慮不此處を駭かせ奉りてい

都て某が罪多り免れ角も各の指揮  
 不委をべし最徳當ふ答へられ流  
 も得了不無法の答へも出かねて唯々  
 して三右の計ひせまらせ和睦に及びし  
 此場は故ふく事済く吉岡歸路  
 赴き三石に至り待合せ下部を伴  
 ひ日ふらむ故郷不歸りけり然不嵩



肥後國熊本の領

流計らむ吉岡が為不覺を取り面目  
 を失ひければ夜逃は同様姫路を登り  
 吉岡を付規ひ怨を晴さんものをと  
 思固より手煉へ我あふら劣りこ  
 を知るものから欺計人を分別也  
 同年霜月筑紫帰る松浦船便  
 船して忍びやう九州下りたる○  
 怨り一程お吉岡太郎右衛門道中  
 障ることもあく故郷名島飯り主君隆景公を拜謝す姫路にてありことも言上不及びり  
 且感一且驚き若汝お何らざればいある慮急をあさん計り難きを老練の取扱ひふりて  
 事ありりの重畳おそれの隆景卿も甚喜悦まりたり茲又佐木島流の密にお名島の城下よ  
 至り吉岡がやうをを規ふこいへも便を得ざりりか或夜のこと吉岡の甚會お招くれ夜更て家路不飯



途(ち)中(ちゆう)道(だう)連(れん)あり一(いち)門(もん)人(にん)等(とう)の送(おく)らんといふを辞(し)退(たい)ふ一(いち)個(こ)微(わい)醉(すい)の梳(か)嫌(けん)ふ乗(のり)一(いち)諷(ふう)をうたひ雨(あま)晴(は)の道(みち)を折(ま)りて既(すで)に早(はや)我(わが)門(かど)近(ちか)く来(き)る時(とき)も何(なに)れ吉(きち)岡(おか)が隣(りん)家(け)溝(みぞ)口(ぐち)源(げん)兵(へい)衛(ゑ)が奴(やつ)僕(め)主(し)用(よう)ひて此(こ)道(みち)筋(すぢ)ふ来(き)り何(なに)の謠(うた)の声(こゑ)隣(りん)家(け)の吉(きち)岡(おか)のあり出(い)合(あ)て礼(れい)をまゐる澳(あ)海(かい)と傍(そば)を見(み)るみ一方(いっ)方(ぱう)竹(たけ)藪(やぶ)より一(いつ)方(ぱう)鳴(な)尾(び)氏(ぢ)が別(わか)荘(じやう)の裏(うら)門(もん)ひて土(ど)墙(か)長(なが)く築(た)巡(めぐ)り一(いつ)擧(あ)の外(そと)み枳(か)穀(こく)の籬(かき)有り頃(ころ)も加(か)月(つき)の中(なか)旬(じゆん)あられ枝(えだ)葉(は)細(こ)うふ繁(しげ)茂(も)りて陸(りく)間(ま)きふ籬(かき)の絶(た)間(ま)所(ところ)々(々)りて身(み)を隠(かく)せよ屈(くつ)意(い)あり茲(こゝ)ふ心(こゝろ)吉(きち)岡(おか)をのを遺(い)過(か)さんとうち合(あ)点(てん)籬(かき)の間(ま)み潜(ひそ)り入(い)ぬ其(その)時(とき)も吉(きち)岡(おか)の彼(かの)下(した)部(ぶ)が隠(かく)れたる籬(かき)の表(おもて)に來(き)かゝるみぞを背(せ)後(ご)の方(かた)より出(い)流(りゅう)の驚(おどろ)脚(きゃく)ひて窺(うかが)ひ寄(よ)るみ吉(きち)岡(おか)の思(おも)ひを濠(わ)江(かう)ふふを以(も)つて前(まへ)の方(かた)に跌(たふ)き既(すで)に倒(たふ)れんとする所(ところ)を嵩(さか)流(りゅう)走(は)り蒐(と)つて抜(ぬ)け打(うち)吉(きち)岡(おか)右(みぎ)の肩(かた)先(さき)を切(き)り固(かた)より手(て)練(ね)ることおれ刀(や)の勢(せい)ひ烈(れつ)くして弓(ゆみ)手(て)の助(すけ)骨(こつ)まで一(いつ)刀(や)切(き)下(くだ)るみ思(おも)神(かみ)と呼(よ)べ一(いつ)豪(ごう)傑(けつ)も二(に)言(ご)をいとも倒(たふ)れ死(し)を嵩(さか)流(りゅう)吉(きち)岡(おか)が髻(むす)を搦(に)握(に)抑(おさ)め伏(ふ)せ持(も)つたる刀(や)を取(と)り直(ただ)し吉(きち)岡(おか)我(わが)先(せん)年(ねん)恥(ち)辱(じやく)を與(よ)つたる其(その)恨(うら)みを覺(おぼ)えたるかど胸(むね)板(いた)を足(あし)下(した)み踏(ふ)付(つ)咽(のど)元(もと)二(に)刀(や)けさ一(いつ)みさ一(いつ)貫(くわん)をみ見て下(した)部(ぶ)の身(み)毛(け)跡(あと)立(た)つ一(いつ)縮(ちぢ)みみあり窺(うかが)ふみ嵩(さか)流(りゅう)前(まへ)後(ご)を見(み)廻(まわ)り一(いつ)刀(や)鞘(さや)み納(な)む折(ま)りも鳴(な)尾(び)が別(わか)荘(じやう)の長(なが)屋(や)の中(なか)み人(ひと)声(こゑ)高(たか)く裏(うら)門(もん)の外(そと)

こそ刀(や)物(もの)の音(ね)の響(ひび)き一(いち)最(さい)怪(かい)一(いち)門(もん)を開(ひら)けて出(い)て見(み)よと署(しよ)の聲(こゑ)を聞(き)くも嵩(さか)流(りゅう)打(うち)驚(おどろ)き東(あづま)を臨(のぞ)み馳(は)去(さ)りける下(した)部(ぶ)も忙(いそ)が我(わが)此(こ)處(こゝ)に隠(かく)れ居(ゐ)て捕(とら)れられて後(ご)日(にち)の難(なん)義(ぎ)を籬(かき)の中(なか)より潜(ひそ)出(い)で道(みち)をかてて外(あ)延(のび)けり然(しか)るも鳴(な)尾(び)の侍(ざむらい)共(ども)表(おもて)に倒(たふ)れ吉(きち)岡(おか)死(し)骸(がい)を見(み)るより打(うち)おどろき鳴(な)尾(び)が本(ほん)宅(たく)走り申(まを)主人(しゆじん)一(いち)訴(う)へ一(いつ)つ俱(く)子(こ)鳴(な)尾(び)も打(うち)おどろき早(はや)速(すみ)其(その)旨(ぢ)を監(かん)察(さつ)に達(たつ)せ一(いつ)ら程(ほど)も檢(けん)死(し)立(た)會(あ)ひて死(し)骸(がい)を逐(お)う一(いつ)のうらためらる一(いつ)み全(ぜん)暗(あん)討(たう)の為(ため)み相(あ)違(ちが)ふく又(また)鳴(な)尾(び)より吉(きち)岡(おか)宅(たく)も知(し)せらる一(いつ)つ妻(つま)此(こ)程(ほど)病(びやう)氣(き)ひて床(とこ)打(うち)ち何(なに)とけがら夫(おとこ)が死(し)を聞(き)くも這(わ)り又(また)いらある因(いん)果(くわ)をや此(こ)春(はる)吾(われ)子(こ)病(びやう)死(し)の上(の上)に夫(おとこ)の横(よこ)死(し)ふ蒐(と)つるとい実(まこと)情(なさけ)あまき此(こ)身(み)りふと愁(うれ)傷(やう)大(おほ)方(かた)より由(よし)も理(ことわり)敷(し)まの胸(むね)みさ一(いつ)込(こ)めて其(その)伏(ふ)息(いき)絶(た)果(くわ)たり然(しか)るも此(こ)事(こと)其(その)翌(あした)日(にち)監(かん)察(さつ)の役(やく)向(むか)ひ子(こ)細(こ)を隆(たか)景(けい)卿(けい)申(まを)上(あ)り九(こ)珠(しゆ)更(さら)惜(おぼ)せ玉(たま)ひ緊(きん)一(いつ)敵(てき)手(て)を吟(ぎん)味(み)を卜(うら)ち仰(おほ)せ一(いつ)つ嘗(かつ)て是(こゝろ)を思(おも)ふ手(て)掛(か)りも何(なに)とせられ門(もん)人(にん)等(とう)吉(きち)岡(おか)が死(し)骸(がい)を乞(こ)ひ妻(つま)女(め)と共(ども)其(その)法(はふ)の如(ごと)く取(と)り行(い)ひぬ此(こ)時(とき)溝(みぞ)口(ぐち)下(した)部(ぶ)吉(きち)岡(おか)が討(う)たれたるやうを詳(つひ)か見(み)一(いち)と難(なん)相(あ)手(て)の者(もの)且(かつ)て當(あた)り家(け)の諸(しよ)士(し)の中(なか)に一(いち)見(み)馴(な)れざるが故(ゆゑ)此(こ)事(こと)口(ぐち)外(そと)吟(ぎん)味(み)を何(なに)難(なん)義(ぎ)ありと敢(あへ)て人(ひと)も語(かた)りされ一(いち)畢(ひ)み知(し)る者(もの)あまりり吉(きち)岡(おか)が家(け)に長(なが)男(おとこ)又(また)太(た)郎(らう)此(こ)春(はる)病(びやう)死(し)一(いち)二(に)男(おとこ)友(とも)次(つぎ)郎(らう)

幼少より熊本の宮本が許(養)子として遣(つ)たる事あれ其家断絶お及ぶも是(是)非もふき次第あり固より吉岡其前(ま)京都(みやこ)住居(すま)後(のち)小早川家(おこはやがわ)仕官(し)せざる故(ゆゑ)子親類(こゝろ)縁者(ゆかり)共(とも)総(すべ)て當所(あた)りらざれば高弟(たかひ)等(ら)うち集(あ)ひて都度(つど)々々(々々)弟(あ)慰(なぐさ)の事(こと)を行(な)ひ既(すで)に一(いち)七(なな)日(ひ)の佛事(ぶつじ)をも仕果(し)果(たま)らざれ何(なん)れ此(こ)の度(たび)の事(こと)をも友次郎(ともじらう)に報(は)知(し)はせと門弟(もんてい)の者(もの)より書翰(しよわん)を著(ま)くつめ肥後(ひご)の熊(くま)本(もと)ある宮本武右衛門(みやもとむさゑもん)が許(許)飛脚(ひきやく)を走(は)せし友次郎(ともじらう)が歎(なげ)き武右衛門(むさゑもん)のおぼろき且(かつ)友次郎(ともじらう)が義弟(ぎてい)武右衛門(むさゑもん)が実子(まこと)友之助(ともすけ)も俱(とも)お打落(うちお)き先門人(せんもん)等(ら)が厚意(こうい)を謝(あ)る返書(へんしよ)を認め飛脚(ひきやく)を帰(かへ)これより友次郎(ともじらう)が仇討(あやまち)の准備(じゆん)を做(な)すこと下の巻(まき)の初(は)めにいふべし

飛脚(ひきやく)を帰(かへ)これより友次郎(ともじらう)が仇討(あやまち)の准備(じゆん)を做(な)すこと下の巻(まき)の初(は)めにいふべし  
 飛脚(ひきやく)を帰(かへ)これより友次郎(ともじらう)が仇討(あやまち)の准備(じゆん)を做(な)すこと下の巻(まき)の初(は)めにいふべし  
 飛脚(ひきやく)を帰(かへ)これより友次郎(ともじらう)が仇討(あやまち)の准備(じゆん)を做(な)すこと下の巻(まき)の初(は)めにいふべし

定價金五錢

NO.1 明治十七年十月廿一日御届  
 同 十八年三月 出版

編輯人 春陽堂  
 出版人 春陽堂

和 田 篤 太郎  
 京橋區南傳馬町  
 一丁目十四番地

實録 白子屋お駒大風政談	同 南總里見八犬傳	同 箕屋喜八大岡政談	同 赤垣源藏徳利の傳	同 佐野鹿藏英勇傳	同 荒川武勇傳	同 宮本無三四二刀傳	花 萩露の面影	香 酒 錦戀の妻折	三 巴 戀 酒 白雪
定價金十錢	定價金十錢	定價金十錢	定價金十錢	定價金十錢	定價金十錢	定價金十錢	定價金十錢	定價三十九錢	定價三十九錢
園花句姫垣	八重櫻里酒夕暮	八重櫻里酒夕暮	小三娘節用	娘節用 若葉登里	物二郎 江戸紫	實話 合鏡心乃妍醜	近世 月雪花戀路の踏分	海南第一 汗血千里駒	異國 和莊兵衛
定價二十六錢	定價二十六錢	定價二十六錢	定價二十六錢	定價四十錢	定價四十錢	定價三十錢	定價六十錢	定價五十四錢	定價八十錢

